

コラム

「英国での浴衣着装ワークショップ」

横浜国立大学 薩本弥生

## 1. はじめに

筆者は、2008年に経験した海外研修をきっかけに日本の伝統文化としての「きもの」文化の価値を意識し、日本の若者や海外にも伝えたいと思い始めた。

おりしも、文化ファッション研究機構において「きもの」文化についての公募があり、これに仲間を募り申請し、採択された<sup>1)</sup>。現在、共同研究メンバーと一緒に日本の「きもの」文化を次世代に伝承すること、世界へ発信することを意図した体験型教育プログラムの開発と授業支援に取り組んでいる。

なお、本プロジェクト研究は、服飾文化共同研究、研究課題名『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発—「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信—』として実施している。筆者の他、堀内かおる氏(横浜国立大学)、川端博子氏(埼玉大学)、扇澤美千子氏(茨城キリスト教大学)、斉藤秀子氏(山梨県立大学)、呑山委佐子氏(大妻女子大学)による共同研究である。

政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討は、これからといえる。

そこで、プロジェクトの一環で「きもの」文化を海外へ発信するための教育プログラムを開発することを目指して上記研究メンバーのうち、筆者と斉藤秀子氏(Fig.1)が2009年度(英国在住の学生や社会人を対象)と2010年度(現地中学生対象)に浴衣の着装ワークショップを実施した。その概要、活動内容を紹介する。



Fig.1 筆者と斉藤氏

## 2. 2009年度の研究内容

日本の伝統文化の一つである「きもの」文化を海外へ発信するための教育プログラムを開発することを目指して、2009年10月に海外での授業実践の準備としてイギリスのラフバラにて日本人会とラフバラ大学の共同研究者 Zanker 氏 (Design& Technology Department)の協力により、現地の大学生および社会人対象【英国在住日本人7名(男1名、女6名)、非日本人19名(男5名、女14名)】に浴衣着装のワークショップ(Fig.2)を行い、①日本の現代・伝統文化に関するアンケート、②開発した英語版着装ビデオの評価、③浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。



Fig.2 社会人対象の浴衣の着装ワークショップ<sup>1)</sup>

## 3. 2009年度の研究成果

アンケートの結果、伝統文化として着物を外国人の9割が知っていた。情報の入手元は、テレビ(88%)に次いで学校(65%)が占め、学校が情報の発信源として貢献していた。浴衣着装後の着装感から、外国人でも浴衣の着装は気分を高揚させ興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信に一定の効果があることが推察された。学校教育はその発信源としての貢献が見込まれた。

## 4. 2010年度の研究内容

前年のラフバラ大学浴衣の着装ワークショップに参加した Stephens 氏(当時、現職教員大学院修士課程在籍)を Zanker 氏から紹介いただき、協力校として Stephens 氏が所属するラフバラから自動車で50分位の所にある Burton on Trent の Blessed Robert Sutton School で中学生を対象に英語版着装 DVD を用いた

浴衣着装ワークショップを行った。対象は15歳のクラス(35名)と11歳のクラス(20名)の2クラスである。英国の中学生も日本の中学生と同様、浴衣を着装すると、とても嬉しそうで、楽しいワークショップとなった。その様子をFig.3に示す。



Fig.3 英国中学生対象の着装ワークショップ

## 5. まとめと今後の展望

本プロジェクトでは、「きもの」文化の海外への発信の方法についての研究を進めている。これまでの海外での浴衣の着装を含む体験的ワークショップ実践やアンケート調査の結果を通して、伝統文化としての「きもの」文化を紹介できる教育プログラムの開発は、新学習指導要領の意図を汲むものであり、国際交流に寄与できることを実感している。

国際交流で浴衣や着物の着装体験を外国の方に実施する試みは他にも見られるが、自分で着装するのではなく、誰かに着つけてもらうことが多いと思われる。一方、本研究では、開発した着装DVDや我々の手助けの元に自分自身で浴衣の着装を試みてもらうところが

特徴である(Fig.3参照)。着装による高揚感から浴衣や着物に関する興味関心が高まることを期待している。

なお、着装ビデオ他の教材は、e-learning教材として以下のサイトに掲載している。

<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp>

本プロジェクト研究は、家庭科教育学、教科教育内容(被服学)、日本文化としての「和服」の研究者がそれぞれの専門性を生かして研究に取り組んでいる。一つのテーマに多様な専門からのアプローチで取り組む研究活動によって相乗効果が得られていると感じる。

4月からはプロジェクト最終年度となる。国内での授業実践の成果も踏まえ、海外発信に向けての授業内容のさらなる改善に向けて検討したい。

文化ファッション研究機構の報告書をはじめとして、広く社会に紹介する機会をなるべく多くもちたいと考えている。本研究の今後を見守っていただき、お考え、ご意見があれば寄せていただければ幸いです。

## 謝辞

研究に当たりプロジェクトの先生方をはじめ、数多くの協力者に支えていただいた。ここに主な方々を紹介し、感謝の意を表したい。

文化ファッション研究機構、大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター山田光栄氏、ラフバラ大学 Design & Technology Department の Nigel Zanker 氏、ラフバラ町日本人会 篠沢久二子氏、浴衣着付けプロジェクトに参加下さった皆様、Blessed Robert Sutton School の Stephens 氏および生徒たち。

## 引用文献

1) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発-「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信-, 90-95 (2010), 服飾文化共同研究報告 2009, 服飾分共同研究拠点, 文化ファッション研究機構, 文化女子大学

**【筆者略歴】** 薩本弥生 (さつもとやよい)

1987年お茶の水女子大学家政学部被服学科卒業, 1989年同大学大学院家政学研究科被服学専攻修士課程修了, 1992年文化女子大学大学院家政学研究科被服環境学専攻博士課程修了.博士(被服環境学).

現在, 横浜国立大学教育人間科学部准教授

連絡先: [satamoto@ynu.ac.jp](mailto:satamoto@ynu.ac.jp)